

シノンの気持ちが爆発  
した。

Death gun

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、アスナたちがクエストすることに。そのクエストに遅れてしまったキリトがシノンと超展開に!?

# 目次

もう、抑えられないの

—  
1



# もう、抑えられないの

アスナ「あれ？キリトくん遅いなあ。」

リズベツト「あと3分だよ。もう間に合わないんじゃないアスナ？」

アスナ「そうね。まあ、しっかりとした約束じゃないからしょうがないね。」

リズベツト「じゃ、行こうかアスナ！」

アスナ「うん！」

—————4分後—————

キリト「あゝ、間に合わなかったかゝ。クエスト終わるまで待つてるのもなんだし街の方に行くか。」

—街中—

キリト「来たのはいいいもの何もする事ねえな。」

トントン

???「ねえ、キリト」

キリト「ん!」フリ

キリト「って何だ、シノンか。ビックリさせんなよ。」

シノン「ごつ、ごめん。こんにちは、キリト」

キリト「よう！こんにちは、シノン！」

シノン「ちよつといい？」

キリト「ん？どうしたんだ？そんな改まった顔して。俺は時間があるから大丈夫だぞ。」

シノン「ちよつとね。。。付いてきて！」

キリト「お、おう」

————3分後——

キリト「おっおいどこ行くんだ？」

シノン「いいから いいから」

キリト「木の下？にしても暗いな。」

シノン「ここなら人は来ないし、誰にも聞かれないよ。」

キリト「ん、まあ、そうだが、にしても何でだ？」

シノン「そんなことはいいいから、私が今から質問するから答えて。」ノシカカリ

キリト「う、うん。にしても何でのしかかるんだ？」

シノン「べ、別にいいでしょ」テレテレ

シノン「キリトに彼女はいるの？」

キリト「前言っただろ？アスナだよ。」

シノン「そ、そうだったわね。で二人は上手くいつてるの？」

キリト「ま、まあな。ちゃんと大事にもしてる。」

シノン「そう。で他の女の子は？リーファさんは妹さんか。シリカちゃんとリズさんは？どう思ってるの？」

キリト「どっちも大事な仲間だ。シリカは慰めてくれたりしてくれるし、リズは武器関係でかなり助かってる。」

シノン「そ、そうなの。恋愛対象として見ないの？」

キリト「な、んなわけないだろ。アスナがいるんだし」テレテレ

シノン「そ、そうね。私の事はどう思ってるの？」

キリト「シノンの事はGGOでもALOでも助かってるしお前も大事な仲間だ！」

シノン「私の事、女として見てるの？…」

キリト「。。。。」

シノン「答えなくていいわ。どうせいいえと答えるんだらうし。」

キリト「何か今日お前変じやないか？喋り方がぎこちないし」

シノン「ふ、普通よ！」カア

キリト「まあ、そうならいいんだが」

シノン「。。。」ギユウ

キリト「し、シノン!?! やっぱりお前今日おかしいぞ!」

シノン「何も言わないで。。。ん」

キリト「GGOの頃を思い出すなあ。」

シノン「そうね。ねえ、あの頃あんた、私のこと守ってくれてるって言ったよね? それって今でも続いているの?」

キリト「ああ、当たり前前だ。」ナデナデ

シノン「」テレテレ

シノン「じゃあ、私の心も守ってくれる?」

キリト「えつ。。。」

シノン「そうよね。。。守ってくれいのよね。キリトの隣にはアスナさんが居るものね。。。」

キリト「シノ」

シノン「言わないで! もう慰められるのは嫌なの! 慰められるのはっ!」グスン

シノン「ご、ごめんなさ、い急に叫んじゃって。私ったら情けないわね、また泣いちやって。。。」

キリト「いいんだ。いいんだ。俺こそごめんな」ナデナデ



シノン「う、うわああああああん」ガクン

シノン（また慰められちゃった。慰められちゃったよお。もう泣かないって決めたのに、決めたのにい）ウワアアアン

キリト「シノン。。。」

シノン「ねえ、私、あんたの事が好き。好きなの。。」

キリト「。。。」

シノン「私の事を慰めるなら、守ってくれるなら、私を見て、私を見て！仲間としてじゃない、友達としてじゃない、アスナさんが、アスナさんがいない時ぐらい私を、私を一人の女として、見て!!!」

キリト「。。。」

シノン「わがままを言ってるのは分かる、わかってる。でも、わ、私、もう気持ちを抑えられないの。。だからお願い、お願いだからアスナさんがいない時ぐらい私を見て。。」

キリト「。。。」

シノン「。。。」グスツ

キリト「シノン！」ギユツ

シノン「ふえ!?!」

キリト「。。。俺、お前の事が好きだったんだ。慰めに聴こえるかもしれないけど、GOで、お前が洞窟の中で泣いて、過去の事を話した時、本当に守りたいと思ったんだ。だから。。。」ギョツ

シノン「ふ、ふええ」

シノン「え、ちよつキリト」

キリト「シノン。。。」チュツ

シノン「んんんん」

キリト&シノン「」プハア

シノン「ん」ハアハア

シノン「あなた、結構大胆なのね。でも、嬉しかったわ、キリト。」ハアハア

キリト「シノン。。。俺、今複雑な気持ちなんだ。。。勢いでやっちゃったけどアスナ

も、」

シノン「いいのよ。私の事はアスナさんがいない時だけで。。。だから、アスナさんと

はいつもどうりに接してあげて」口封じ

キリト「シノン。。。」

シノン「さっ、そろそろアスナさん達が帰ってくる頃ね。私たちも行きましょう！」ニ

カッ

キリト「お、おう！つてお前アイツらがクエスト行くこと知ってたのか!？」

シノン「当たり前じゃない。誘ってきたのはアンタじゃない。」

キリト「そ、そうだっけ？」

シノン「そうよ。まあ、そんなことより早く行きましよ！」手握り

ーーーーとある噴水ーーーー

アスナ&リズ「おーい！キリトー！シノンー！」

キリト「行こうぜシノン！」

シノン「あ、ちょっと先に行つてて。」

キリト「おう！」タッタッタ

アスナ「もう、何で遅れたの？」プンプン

キリト「ご、ごめんなアスナ。だってな・・・」ペラペラ

シノン「キリト私は諦めないからね。キリトが私を本当に好きになるまで。」ニカツ

キリト「おーい、シノンも早くこつち来いよ！」

シ  
ノ  
ン  
「う、うん！」  
タ  
ツ  
タ  
ツ  
タ